

川越市小仙波御嶽講について

講元 岩澤 豊

小仙波は、川越旧市街地の東に位置し、町内には国重要文化財に指定されている喜多院仙波東照宮、日枝神社など旧跡が多く歴史のある町です。小仙波には以前、大山講や榛名講もありましたが、戦後まもなく大山講、平成六年に榛名講を解散し、今は御嶽講だけとなりました。小仙波の講の歴史は古く、御嶽神社の御札が納めてある祠には、嘉永元年戌年と刻まれています。また、それ以前の文政年間に榛名神社へ代参に行っていたことが、神社の宝物殿にある代参帳からわかっていきます。それらから推察すると、御嶽講もその時代にはすでにあったと考えられます。



現在の講員は、小仙波上、下、前方の三地区を合わせて四十一名で、そのうち世話人が九名おり、その方々が中心となり講の運営を計っています。御師は靱矢正様で、靱矢増太郎様の後を引き継がれ、大変お世話になっております。毎年十二月には来講され、以前は交通が不便であったため二、三泊して講をまわられました。私の家にも泊まって頂きました。今でも師走には幣束や紙垂、御札などを頂き新たな歳を迎えています。また、御嶽神社の御札を納める祠は仙波東照宮の境内にあり、御師さんの来講時に世話人が集まり、祝詞をあげていただき御札の入れ換えをしています。代参は毎年行っていますが、太々講は十年に一度実施しております。昭和三十七年から毎回講員の名前を入

れた記念額を奉納しています。最近では、平成十五年に講員多数の皆さんの参加を得て行うことができました。御嶽講は五穀豊穰、家内安全、町の泰平を祈願し、親睦の旅行もかねて始まったのではないかと思われます。しかし、私も含め小仙波も専業農家が減り、信仰心も少しずつ薄れてきたような気が致します。講の本来の目的をもう一度見直すとともに、講の存続のためには無理のない運営が必要ではないかと思ひます。この歴史ある小仙波御嶽講を、御師さん、世話人、講員の皆さんのご協力で末永く続けられることを願っております。おわりに、御嶽神社の益々のご隆盛と、神社関係各位のご健勝を心よりお祈り申し上げます。

男具那社



奥の院（一、七七〇㊦）の山頂のすぐ下の社に、日本武尊が祭られております。この社もだいぶ古くなり、式年大祭事業の中で解体修理が行なわれ、漆で塗られ新しく美しい社になりました。祭典は毎年五月十五日午前十時より行なわれます。是非多数の皆様が参拝なされますように。

橘姫命の石碑

奥の院へ登る途中にある。橘姫命は日本武尊の妻で、尊が危難にあった時に自分の身を捧げて難を救った神話は有名である。

また橘は、一種の霊樹である。常葉樹で、冬でも枯れず実をつけるという強い生命力をも表わし、尊の力を強めたと考えられる。

数年前に石碑が破損し、修理を行いました。



浦安の舞講習会



今夏、恒例の浦安の舞講習会が、当神社神職・天野宣子の指導により行われた。三期に分け、全日程十三日間に、夏休みを利用した地元の小中学生子女八人が参加した。その後は、神楽殿での神楽と雅楽の一般公開、大鳥居前広場での薪神楽で舞われることになる。